原著

ピアノ初心者のための導入期の教材についての考察

森　麻希子*

Discussion of Introductory Materials for Beginners at the Piano

Makiko Mori

子どものために作られた指導教材は数多く存在しピアノ教本、楽典、譜読みのためのワーク、ソルフェージュ、それ単体で作られたものや、総合的に系統立てられたものといったように多岐に渡る。またバスティンメソッド、クローバーピアノ教本、その他にもその時代にあった子どものための系統だった指導教材が作られてきた。学習者のためにより良い指導教材を考案するのは必然であり、保育養成校においても同様である。先行研究や各養成校のシラバスを見ても、バイエル、ブルクミュラー、ソナチネだけでなく、ギロックなど新しい教材を導入、また独自の方法でピアノを教授する養成校もある。本研究は、大人の初学者のために考案された系統立てられた教材の少なさに着目し、先行研究をもとに保育者養成校にふさわしい「新しい教材」の在り方について考察したものである。

Key words:　ピアノ指導、ピアノ導入期、保育者養成、音楽教育、教材の考察

1．はじめに

保育者養成にふさわしく、大人のために新たに系統立てられたピアノ初学者のための学習教材が考案される必要があるのではないかと考えた。

現状として、こどものための導入期の教材は多岐に渡り、様々な作曲家によりその時代、状況に応じて必要な教材が考案されてきた。例えば、ツェルニー（1791-1857）、バイエル（1806-1863）、ブルクミュラー（1806-1874）、バルトーク（1881-1945）、バーナム（1907-2007）、ギロック（1917-1993）、ジェームズ・バスティン（1934-2005）、日本国内においては湯山昭、三善晃、遠藤容子、田丸信明、呉暁など、無論これだけに留まらず多様な作曲家がこどものためのピアノ曲や、系統だった教材を考案している。

それでは、現在市場に流通している大人のためのピアノ導入期の教材はどのようなものになっているのだろうか。楽器店や書店を見てみても「おとなのための」と銘打った楽譜は相当数あるように見受けられる。しかしその殆どが、先に挙げたようなツェルニー、バイエル、ブルクミュラーといった古くからある教材を「おとなのための」と銘打ったものか、馴染み深い有名な曲や、J-POPなど流行歌を簡易にしたものなのである。

保育者養成校においてはバイエル、ブルクミュラー、ソナチネが取り扱われることが多く、先行研究においても様々な視点でその是非が問われ続けそれぞれにメリット、デメリットが挙げられてきた。また、辻（2019）らが検証した「ピアノ指導」に関する論文の研究動向によると、2009年から2019年３月までに抽出された150論文のうち、73％にあたる約110論文が保育者養成課程のピアノ指導に関するものだったという。辻らが論文の研究方法を分類した結果、「実験」を論じた論文が21編あった。これは、「これまでの指導とは違う新たな試みについて考察、または提案として論じている[1)]」ものであり、このことからも保育者養成課程におけるピアノ指導への問題提起がなされることがよく分かる。

養成校ではピアノの演奏を通して「音楽」を学び、主体的に表現することが必要だと考える。保育者が瑞々しい感性と感動を持って子どもに音楽を提示することにより、より豊かな感性が磨かれるのではないだろうか。そのためには保育者自身が楽譜から音楽を適切読み取り、自身の身体、精神を適切にコントロールすることが必要となる。

＊　四條畷学園短期大学　保育学科

本研究では、保育者養成校の限られた年数で、ピアノ初学者がスモールステップで効率よく学ぶためにどのような内容が必要とされるかを考察するものとする。

２．ピアノを学ぶ上で必要な基礎能力

保育者養成におけるピアノ指導でよく言われるのは、一流ピアニストのような演奏技術は必要としておらず、保育現場で対応できるピアノが必要だということではないだろうか。手の形や拍子とリズムの関わりなど基礎的な指導をしている際に、学生からも稀に「私はピアニストを目指していないのに」ということを聞くことがあった。自分の演奏を客観的に聴き、判断するということについて、それなりの経験と習熟が必要になるため、そのようなぼやきが聞かれるのもある意味では仕方がないのかもしれない。しかし、仮にある曲が正しい音で弾くことができたとしても、良いリズムの流れが感じられなかったり、テンポの取り方が適切でなかったりする場合は修正されるべきだろう。また、基礎的理解がなぜ必要かを納得できるよう説明し、今後どのような形で役立つのか理解できるよう促す必要があるだろう。

それでは、幼児向けの導入書はどのようになっているだろうか。バスティンピアノベーシック[2]では練習の仕方について以下のように但し書きがされている。

*れんしゅうのしかた**

１．リズムをかぞえながら　手をたたきましょう。
２．手をただしいポジションに　おきましょう。
３．がくふをみて　ひきましょう。
４．音名をいいながら　ひきましょう。
５．リズムをかぞえながら　ひきましょう。
６．うたいながら　ひきましょう。

**先生へ ： いつもこの方法で練習させて下さい。*

この「れんしゅうのしかた」はCメージャーポジションから始まる練習曲「行進しよう」に記載されている。このことから、拍子を感じながら正しくリズムを数えられること、適切な手の形と鍵盤の位置の把握、楽譜を見たまま演奏できること、音名を正しく読み取れること、ピアノを奏する上でもリズムや拍子の流れが適切であること、歌詞または音名を歌うことでより具体的なイメージを持つことがピアノ初学者に求められていることが分かる。

歌詞は「１．どれみふぁそそ　そふぁみれど（繰り返し）、２．のぼりましょう　おりましょう　たまごのようにまるめましょう」とあり、１番の歌詞を歌うことによって、音名と音高感を結びつけ、２番の歌詞では音程の上行、下降の概念とピアノを弾くうえで必要不可欠な手の形について言及されている。この練習曲自体はドからソまで登って降りるだけのシンプルな曲であるのだが、大譜表が使用されており左右それぞれの手で弾かれる。冒頭にフォルテと指示があることや、「行進しよう」という標題からも分かる通り、子どものはつらつとした息遣いにふさわしい音楽が容易にイメージできる。

初学者は特に大譜表における「ト音譜表」と「ヘ音譜表」を“別のもの”として意識し「ヘ音譜表」に対して苦手意識が強い傾向があるが、ピアノを学ぶ上では一体の楽譜として認識する必要があるだろう。ピアノ鍵盤が低音部から高音部まで連なっているように、大譜表の音高もＣ４を共通のものとして上下に広がっている。呉暁（1991）も述べているように、譜読みには「その位置を覚え込んでしまうやり方と、ドから５度だからソ……というように距離感覚で読むやり方」[3]がある。譜表と音との位置感覚を適切に理解する必要があることがわかる。また、F.クラークらによるミュージックツリーにおいても、大譜表においてランドマークというＦ３、Ｃ４、Ｇ４の位置を示す目印のことが冒頭で提示されており、鍵盤と大譜表の関係性が理解されることが求められている。

３．学生を指導観察し見えてきたこと

2009年から現在に至るまで学生へのピアノを指導により見えてきたことがある。

育ってきた環境が一人一人違うように、ピアノにおける困難の現れ方は様々であるが、下記のような事例があった。

指導していて実際にピアノ初学者にあった事例。

◆拍子、テンポ、リズムに関して

・拍子（ビート）に乗って弾くのではなく、メロディに合わせて拍子（ビート）を取ってしまう。
・裏拍が数えられない。

・ゆっくりとしたテンポで弾くことが難しい。
・片手でゆっくりとしたテンポでコントロール出来ても、両手になると速くなる。(拍子感の欠如)
・同じリズムパターンであっても、音高が変わるなど前後の流れが変化すると弾けなくなる。
・学びの進度に応じた適切なテンポを維持できない。(習熟度に対してテンポが速すぎる場合が多い)

◆読譜に関して
・音名を読むときにいつも「決まった音」から数えてしまう。
・部分練習をせず、全体の練習ばかりに偏る。
・楽譜の音高が同じままで運指が変わった際、そのままのポジションで誤った音を弾いてしまう。
・八分音符と付点八分音符のような区別が不十分である。
・音が分からなくなった際、鍵盤を注視し、楽譜を確認しない。
・音型や付点など楽譜上の変化に鈍感である。
・調号、拍子記号を把握せずに弾き始める。
・強弱記号を意識しない。
・スラーとタイを適切に把握できていない。
・弾き始めの音を探すのに時間がかかる。(音名の把握、または鍵盤のマッピングが出来ていない。)
・楽譜を読み取ることを嫌がる。
・音名を瞬時に判別できない。
・あまり慣れていない曲でも楽譜を見ず、手元ばかりに集中してしまう。
・誤った音を、違和感をもったまま弾き続ける。(そもそも違和感をもたない場合もある)
・ポリフォニーの概念に乏しいので、片手内に複数パートが存在することを理解しにくい。

◆演奏に関する身体的なことについて
・指先だけで弾いてしまい、音が繋がらない。
・指を支えられず滑ってしまう。
・打鍵の際、左右がどちらかにつられてしまう。
・演奏のたびに指使いが変わる。
・親指　MCP関節からの打鍵。
・２～４の指　PIP関節からの打鍵、指先の動きだけで打鍵。
・和音をつかむ際に指だけで打鍵。(手の重みを効率よく使用していない)
・鍵盤の位置を瞬時に把握できない。
・手首が下がってしまう。
・６度、７度、８度の手の感覚があいまい。

このように、拍子やリズム、読譜についての基礎的なことが出来ていないことから生じる問題、自分自身を適切にコントロールできないテクニックの問題があげられる。

練習をしているにも関わらず、特に進度の遅い学生の特徴として、楽譜を読み取ることに時間がかかり、音名と鍵盤のマッピング、手のポジションの把握や身体的動作が結びついていないことがあげられる。また、緊張やミスが生じるなど学習者にとって不測の事態が起こった時に、弾き直すたびにテンポが上がっていってしまうことや、把握できていたはずの音が分からなくなってしまう場合がある。精神的なゆとりがなくなることにより、一種のパニック状態になってしまい適切なコントロールができず悪循環に陥ってしまうのだ。

また手の形について「指を丸めて」弾くことを意識するあまり、指関節の可動が十分に為されていない場合がある。指先で指の重み、手の平の重みが適切に支えられていると結果、指は自然なアーチが得られる。その際の一つのチェック方法として、机や鍵盤の上でピアノを弾く手の形を作り、教師が指と手をつなぐ関節のあたり、手の甲を上から押さえてみる。指の支えや手のバランスが不適切な場合、手の形が潰れてしまう。手の甲、屋根とも言える部分が潰れてしまうということはエネルギーの伝達が適切にできておらず、指先だけの可動となり効率的な身体の使い方が出来ていないことになる。身体の使い方には個人差があり、意識しなくとも自然体でできる者、コツさえ掴めればできるようになる者、習得までにかなりの時間を要する者と様々である。いずれにせよレッスンの中で根気強く伝え体感させていく必要がある。身体の使い方はテクニックに関わり、テクニックは音色や表現に密接に結びつくからだ。身体的なコントロールと音楽に必要な基礎的能力が快い音楽を奏でる土台となる。これらは、保育者

にとっても必要な力だと考える。幼児期において良いリズム感の伴った、心地よい音楽に直に触れられることは、感覚を刺激し健やかな成長を促すうえでも必要だからだ。

４．「新たな教材」に求められる内容について

これまで述べてきたことは、時間をかけることができれば一定程度のレベルまで学ぶことができるだろう。しかし、短期大学の２年間という限られた期間の中でいかに効率よく学ぶか、また予習復習が義務づけられる中でいかに練習時間を日ごろから確保するかが問題となる。また、授業内で学ぶ内容はピアノだけでなく、歌唱方法、童謡の表現、リトミック、音楽を用いた保育における指導法のことなど多岐に渡る。音楽を学ぶ上で必要な基礎的能力について、様々なアプローチから総合的に学ぶことができるのが理想ではあるが、授業時間が限られていることを考えるとピアノ奏法を学ぶ上で効率的に学習できることが望ましい。新しい系統だった教材を今後考案する手がかりとして下記の内容を含めることを提案したい。

・基本姿勢や手の形を適切にするための、簡易なエクササイズ
・読譜能力向上のために、楽典、ソルフェージュの要素と演奏を結びつけるための工夫やワーク
・リズム打ち
　レッスン課題曲の負担にならないよう、長くても10秒程度で出来るもの。
　メトロノームを用い、必ず拍子を取る。
　４拍子、３拍子、６拍子、強弱、腕の動きを自由にするためにも、クラップする際は音価にあった空間と筋感覚を意識する。
・新曲視奏およびテクニックための簡易で短い練習曲
　初期の段階から、スタッカート、スラー、強弱を織り交ぜ、徐々に臨時記号や調性による変化をつける。音楽的に豊かなものを求めたいところではあるが、初見の難易度が上がってしまう恐れがあるので、あくまで易しいものであること、バーナムピアノテクニックのように譜読みが容易にできることを基本とする。教師が伴奏を付けることにより音楽的な聴取やノリを体感できるように構成することが望ましいだろう。
・バイエルやブルクミュラーなど曲の再編し、ギロックなどのダンスビートが感じられる曲の導入
・イメージやテンポの在り方で音楽的変化が聴かれる教材

レッスンの中で教授していくことはもちろんであるが、初学者が自学する際に系統だって理解できる内容であることが望ましいだろう。また、苦労して読み進めていくのではなく直感的に理解できるような構成であることが望まれる。小さな達成感の積み重ねが学習者にとっても良いモチベーションになることを期待する。

５．おわりにかえて

ピアノや音楽を学ぶ上での困難の度合いは個人差が大きい。初学者がピアノを学ぶにあたり、読譜の難しさや継続した練習の必要性があることから、ピアノを倦厭してしまうことが少なからず起こりうる。それらを取り除き、スモールステップで確実に習得できるよう現代の保育者養成に必要な教材が確立される必要がある。この「新しい教材」についての考察は、既存のものを否定するのではなく、より効率よく的確に学べるよう現代の大人にふさわしい教材を模索するものである。

それは、ただ単にピアノの演奏技術を向上させることが目的ではなく、ピアノを通じて音楽の在り方を学ぶことで感性を磨き、音を通じて多様な自己表現ができることを目標とする。そのためには良い耳を育て、音楽的な状況を的確に把握し自分自身をコントロールできなければならない。さまざまな対応力が求められる保育現場においても必要な資質といえるのではないだろうか。より良い形で「新しい教材」を実現できるよう、今後も研究を重ねていくことが求められる。

引用文献

１）　辻陽子、伊東陽、安久津太一（2019）：「保育者養成課程におけるピアノ指導の意義――最近10年間の研究動向を通して――」　岡山県立大学教育研究紀要第４巻１号
２）　バスティン：「バスティンピアノベーシックス　ピアノ　<ピアノのおけいこ>　レベル１、p.7
３）　呉暁（1991）：「ピアノの上達はソルフェージュから」　音楽之友社　p.148

参考文献

・正木文恵（2020）:「保育者養成糧における　ピアノ教則本の一考察」　高等教育研究26号127-134
・吉村淳子、芝崎美和（2015）:「保育者養成におけるピアノ指導について―学生の自己効力感に着目して―」　新見公立大学紀要第36巻　59-66
・柿沼涼子、加藤あや子、河田慈人（2016）:「バスティンメソードを軸とした新しい音楽教授法　『リトミックソルフェ』に関する一考察」　エデュケア2016第37号9-17
・トーマス・マーク、トム・マイルズ、ロバータ・ゲイリー著、小野ひとみ監修、古谷晋一訳（2006）:「ピアニストなら知っておきたい身体のこと」春秋社
・フランシス・クラーク（1998）:「ミュージックツリーテキストブックパートA」全音楽譜出版社
・エドナ・メイ・バーナム（1975)「バーナムピアノテクニック　ミニブック」全音楽譜出版社

－2020.11.9受稿、 2020.11.9受理－